

## 第1章 イギリス・ジェネラルバプテスト（1660年まで）

ジョン・スマイスとトマス・ヘルウィスが歴史に登場するずっと以前、イギリスには「アナバプテスト」（「再洗礼をする者たち」の意）がいた。ヘンリー8世はそのうちのわずかな者たちを捕らえ、幾人かを火刑に処した。が、全部とは言わないまでも、そのアナバプテストの多くは外国人だった。ヘンリー8世の後に即位したエドワード6世の治世下、多くのアナバプテストが牢に繋がれ、棄教を迫られはしたものの、実際に処刑されたのはケント州出身のジョアン（Joan of Kent）とオランダ人外科医ジョージ・ヴァン・パリス（George van Parris）の2人だけだった。しかし、エドワードの側近は、イギリス南東部地方にアナバプテストの教えが広がるのを懸念して止まなかった。エドワードの時代のプロテスタント宗教体制から離れた者たちの中には、確かに幼児洗礼の反対者もいたであろうが、その他大勢は、聖書に精通した信徒たちであったに違いない。そうであれば、そのような人たちが警戒したのは、幼児洗礼よりもカルヴィン主義神学に賛同する神学思想が広がることであつたはずである。確かに、急進派の多様なグループに関して適切な定義を立てるのが困難であるのは周知のことである。それらグループの最も代表的で、かつ有能な指導者はヘンリー・ハート（Henry Hart）であつた。この人は、エドワード6世の後に王位についたメアリー女王の治世に至っても、全く自由に、そして極めて精力的に活動を継続していたようである。その後にエリザベス1世が即位すると、あらゆる意味において明確に「アナバプテスト」と見なされていたイギリス急進派運動のすべての足跡は瞬く間に消え失せた。1575年のロンドンで、わずかばかりのオランダ・アナバプテストが処刑されてはいたが、である<sup>1</sup>。

初期イギリス・バプテストがイギリス分離派から派生したことを疑う者はいない。しかし、そこに16世紀のアナバプテストの影響が、それがイギリス国内、または大陸のそのいずれかであつたにしても、分離派の発展にある程度の、それも無視できない度合いで影響があつたか否かに関する論争は未だ決着を見ず、今日まで存在している。

しかしながら、分離派登場前夜には最初期のイギリス急進派運動が消滅していたことと、この両者に共通する「集められた教会（gathered church）」という概念の間には、一見すると或るつながりが暗示されてはいる。しかし、先に述べた影響の可能性については、切り離すことのできない形で存在し、かつ複雑に絡み合った3つの要素によって、本質的にその解明が不可能とされてしまった。まず、キリストの教会の本質的特徴について、両方のグループがそれぞれ別個に出発し、最終的に同じ結論に達したということは十分に可能であつた。なぜなら、両者は、信仰に関してその変わることはない型や青写真を提示する聖書に、ことある毎に根拠を求めるプロテスタントの特徴を持っていたからで

<sup>1</sup> Champlin Budge, *The Early Baptist Dissenters*, 2 Vols., Cambridge, 1912, 41-67.

ある。次に、たとえ分離派がアナバプテストから何かを学んでいたとしても、次の2つの理由で両者はそれを認めるはずはなかった。第1に、両者共、自らの確信は聖書のみから来ており、人間の伝統からではないということを常に強調するように心がけていた。2番目に、いかなるヒントやアイデアであってもその典拠としてアナバプテストを引き合いに出すのは、16世紀、17世紀では、人々の心を閉ざし、拒否反応を惹き起こすに十分であると知っていたからである。最後に、「アナバプテスト」の影響がイギリス分離派の思想の深化の前提として必要ないというもっともらしい説明が、イギリス分離派の発展の記録に存在しているからである<sup>2</sup>。

「バプテストとは誰だったのか」という題の論説<sup>3</sup>で、W. S. ハドソン博士は以下のことを暗に述べている。つまり、今日の一定のエキュメニカルな課題は、彼の問いの下敷きではあるが、しかし実のところそれらは、現代のエキュメニズムの信奉者ばかりではなく、歴史家にとってもそれほど意味のあるものでないということを、筋道を立てて議論すべきであると言う。次に、人の手によるかなりの量の神学的・歴史学的巧妙さは、17世紀イギリスの主要なバプテストグループのどちらをも、20世紀のエキュメニカルな議論に居心地よく参加させることはできない、と言う。ハドソン博士のこの論説に対してE. A. ペイン博士は応答を試み、大陸のアナバプテストがイギリス・バプテストに影響を与えたという考え方には無理があるように思えるとした上で、「17世紀の宗教生活は、四方八方から風が打ちつける荒れ狂う海のようなだった。私が確信するのは、その前の世紀に、ある強力な風がアナバプテスト運動から吹いてきたということである。」<sup>4</sup> 確かに、アナバプテストが初期の分離派に影響を及ぼしたという考え方よりも、17世紀のイギリス・バプテストの始まりにある程度の影響を及ぼしたとする可能性の方がより説得力はある。しかしながら、たとえそうであったとしても、ジェネラル・バプテストとカルヴィン主義バプテスト双方の起源にアナバプテストの影響がどれほどあったのかを判断する慎重な研究が、看過できないほどの決定的なアナバプテストの影響を証明できなかったことは心に留めておくべきである<sup>5</sup>。

他方、ジェネラル・バプテストとパティキュラー・バプテスト（原著10頁〔本訳「概説」〕参照）の双方は、独立派と同じく、分離派からかなりの確信部分を受け継いでいるのは極めて明白であり、それもその最も重要な主張を継承している点は注目に値する。分離派の信仰告白（1596年「真理の告白」）では、以下が主張された。

- i. 地上のキリストの教会は、「キリストが自らの言葉で定めた役員とキリストの法」によって統治されねばならない。
- ii. キリストを信じる個々の信者は、そのように統治されている会衆の一員として、他の同

<sup>2</sup> B. R. White, *The English Tradition*, 1971, *passim*.

<sup>3</sup> BQ XVI, 1955-6, 303-12.

<sup>4</sup> E. A. Payne, 'Who were the Baptists?', BQ XVI, 8, 1956, 339-42.

<sup>5</sup> Lonnie D. Kliever, 'General Baptist Origins: the question of Anabaptist Influence', and Glen Stassen, 'Anabaptist Influence in the Origin of the Particular Baptists', *Mennonite Quarterly Review* XXXVI, 1962, 291-348.

心の信者たちと共に契約を結ぶ権利と責務を持つ。

- iii. どの教会も自らの指導者を任命する権限を持つ。
- iv. 同じく、教会員の受け入れと拒否、そして必要な時には教会員への譴責を行う権限も持つ。たとえ該当者が高位者の場合でも、それは変わることはない。
- v. 他の教会が困難な状況にあり、助けと相談を求めてきた場合、進んでこれに応えるべきである。
- vi. 最終決定権は聖霊とみ言葉の導きの下にある教会全体にあり、ある特定の教会員に、たとえ教会内で指導的立場にある人々であったとしても、最終決定権があるのではない。
- vii. 教会員全員は国家の忠実な市民としての責任を果たす。しかし、神の命令とカエサルの命令の間に齟齬が起こった場合は、神に従うべきであり、それに付随するカエサルの懲罰は抵抗することなく受け入れなければならない。

注目に値するのは、主要なバプテストグループのどの信仰告白も、分離派信仰告白の第39項にある、偽りの教会を取り締まり真実の教会を「大事にまもり、保護する」という国家の責務を記していないという点である<sup>6</sup>。

事実、トマス・ヘルウィスと彼の仲間たちがイングランドへ戻り、ジョン・スマイスが死去した後、スマイスと共に留まった者たちは自らの信仰告白において一つとなり、その第84項に次のように記したのだった。

為政者には、あらゆる宗教や教義に関して人間に圧力を加え、強要するといった宗教と良心の事柄を裁く権限は与えられていない。キリスト教を自由にしておくこと、個々人の良心を自由にしておくこと、市民の違犯を取り締まること、それだけが為政者の責務である・・・<sup>7</sup>。

---

<sup>6</sup> Lumpkin, 87-96.

<sup>7</sup> 同上、140.